

『鏡花と怪異』

田中貴子著（平凡社、2006年5月）

文学部教授 田 中 貴 子

——鏡花って、金沢生まれの明治の文豪、泉鏡花ですよね？ 先生は近代文学がご専門なんですか？

——いえいえ、違うんですよ。私の専門は中世国文学、それも鎌倉時代から南北朝時代くらいの仏書の説話が本当の研究テーマなんです。

——じゃあ、どうして今回、鏡花を取り上げたんですか？ それも「怪異」なんて、あんまり聞かない言葉ですが…。

——泉鏡花についてはすでに国民的作家になっているので、ここでは説明を省きますね。彼の作品といえば、多くの人は『婦系図』のような演劇化されたものを思い浮かべがちですが、全集を通読してみると作品の約八割に幽霊やお化け、あるいは怪奇な現象が出て来るんです。このことは一部のホラーマニアには知られていましたが、そうした「あやしい」作品群がほとんど文庫になっていない（最近、ちくま文庫で出ましたが）ので、広く読まれる機会が少なかったのが残念だったんです。それに、小さいときから怪異な話が日常会話のレベルで話されるといふ京都の生まれなので、お化けにシンパシーを感じてしまうんですよ。鏡花と同じですね、「好きなもんは好き」。

——なぜ今回、専門外の近代文学に手を出されたんですか？

——私が研究している仏書の説話というのは、いつどのようにして発生したかわかる場合はごく少なく決まった作者もいません。そして、いろいろな文献に同じような話が出て来るので、研究方法はできるだけたくさんの文献資料にあたって説話を集める、ということになりがちです。公刊されていない資料は、お寺や文庫などの所蔵者へお願いして拝見に行ったりもします。

こうした研究を大学院生時代からずっとやってきたのですが、私には、一種類の「作品」とじっくりつきあう、という読み方への憧れがあったんですね。だから、近代作家の場合、全集さえあればある程度分析だけでやれるのだろうと空想していたのですが、いやはや、これがまったく違いましたね。結局したことは前と同じ、地味な作業の積み重ねでした。「大正六年当時、ハムサラダはいくらだったか」なんてのを調べていたときもありますよ。毎年夏休みに執筆にあててのですが、今回は後期にずれ込んだのでかなり辛かったです。毎日、『鏡花全集』の一冊を鞆に入れて通っていましたが、あの重みが、今となってはしみじみ懐かしいです。

——反響はどうですか？

——幸いにも新聞や雑誌に五、六の書評が載りましたが、いずれも微妙な感じがありましたね。ホラーマニアの人たちは無視していますが、いつものようにかなり批判したからしょうがないでしょう。周囲の人の話だと、第四章の「茸の怪」と第五章の「幻のユートピア」が面白かったらしいですが、前者は最も気楽に、後者は最も気を張って書いたんで、ちょっと拍子抜け。ああそう、関心ない方も表紙だけは見てください。小村雪岱です。これで、鍋木清方（『聖なる女』）、鰭崎英朋（『〈悪女〉論』）と、「鏡花御用達絵師」三人の絵をすべて自著の表紙に使わせていただきました。鏡花ファンとしては嬉しい限りです。

——これからのお仕事はどういったことを？

——今後五年間、長期休暇は書き下ろしのため差し押さえされていますが、「骨と死体の文学」「京都論批判」などなど、構想はいっぱいです！